



(一社)静岡県動物保護協会会長賞

リクが教えてくれたこと

三年 御宿羽詩

二〇二四年九月、柴犬のリクは虹の橋を渡った。十九才、大往生だった。それでも私は巨大なハンマーで背中を殴られたように苦しくて、もう起き上がれないと思った。リクは祖父母の家で飼われていて、一人っ子の私の一番の遊び相手だった。一緒にベリーを食べたり、シャボン玉を試してみたり、近くにはいつもリクがいた。しかし、私が大きくなるにつれて、部活の忙しさ等を理由にリクと会う日が徐々に少なくなった。

私の家には二匹の犬がいる。ボーダーコリーのフィン七才とシェルティのラズリ四才だ。二匹はとにかくかわいい。フィンはドジっ子の甘えん坊男子。私の都合など気にもせず「撫でてー」とヒコーキ耳にしてすり寄ってくる。一方のラズリは怒ることを知らない愛嬌抜群女子。お姫様のように座っていたその三分後にはへそ天して爆睡。何をしても愛くるしい。二匹は私の兄妹であり、精神安定剤のようでもある。ハグをするととびきりふわふわで、温かくて、なぜか私の腕の中にピッタリと収まる。私のイライラや不安、疲労を一瞬で消し去ってくれる。私の横に居てくれないと困る存在だ。でもふと思う。明日には居なくなってしまうのではないかと。気がついたらリクが亡くなってしまったように。

リクが亡くなる一ヶ月ほど前に久々に祖父母の家を訪れた。リクはおむつをして横たわっていた。水で湿らせた豆粒ほどのカステラをなんとか飲み込む状態だった。触れても反応はなく唯一もう何も見えなくなった目をわずかにぴくっと動かすだけだった。できることなら以前のように「触るな」と怒ってほしかった。

ペットを迎え入れる時、どれだけの人が十年後二十年後を想像しているのだろうか。ペットの「老い」に向き合う覚悟をもっているだろうか。愛くるしいペットが認知症になったり、トイレを失敗したりする日が来る未来が見えているだろうか。介護にはお金も付きそう時間も忍耐も必要だ。ペットは人のようにひとり立ちすることはなく、最初から最後まで人の手と愛が不可欠だ。

いずれ、そう遠くはない未来にフィンとラズリにも「介護」が必要となる日が来るだろう。そしていつか、別れを受け入れなければならない。想像するだけで鼻の奥に水が入ったような感覚になるが私の心にはリクが教えてくれたことがきちんと根付いている。それは命の始まりから終わりまでを支える覚悟と責任を持つということ。その覚悟を今だけは一旦胸の奥にしまい、今は愛しい二匹と楽しく過ごすことに精一杯でいたい。そして私の時間をたくさん共有したい。